



たいむマシン

消防の今と昔

創建から130年余り。成長を続ける札幌の街は時の流れとともに刻々とその表情を変えてきました。このページではそうした歴史の一場面を写真とエピソードでたどります。今回のテーマは、「消防」では、「時空散歩」へと出かけましょう

明治五年の御用火事。 そのとき札幌消防の 歴史が始まった



大正10年に購入したアメリカ製自動車ポンプ「ラ・フランス号」(右)と日本製のはしご車(左)。これで消火能力は格段に向上したが、大雪の際には除雪が不十分で、出動不能になることもあった



最大地上高50mの最新鋭のはしご車。15階の高さでも救助活動が可能で、高層建築物での火災時に活躍する

北海道開拓使が置かれた当初、大きな損害を引き起こす野火がしばしばあり、札幌の「名物」の一つともなっていた。その原因は、雨露をしのぐ程度で火に弱い笹小屋からの失火。そんな状況に頭を悩ませた開拓判官岩村通俊は、開拓の成否が火災防止にあると考えた。そこで、元凶となる笹小屋の改築を命じるが、一向に実行されない。業を煮やした岩村が範を示そうと、官設の建物の中に点在する笹小屋を一掃するため断行したのが、お役所による放火とも言われる「御用火事」である。このとき、民家への延焼を防ぐ目的で組織されたのが、私設の消防隊「中川組」。明治五年のことであり、これが札幌消防の始まりとされている。もともと、当時使われた木製の手押しポンプ「竜吐水」は、水圧が低く放水量も少なかったため、それほど実効性はなかったようである。札幌草創期の特筆すべき火災は、明治十二年の開拓使本庁舎の焼失だろう。囚人まで駆り出し、懸命に消火に当たったものの、あえなく全焼。日本の代表的な木造建築物の一つとも言われた三層楼の庁舎の滅失は、当時の人々に大